

ジョエル・E・コーエン著 (重定南奈子・瀬野裕美・高須夫悟訳)

『新「人口論」 生態学的アプローチ』

農村漁村文化協会・1998年・A 5判・656p

本書は1995年に出版されて話題となった“*How Many People Can the Earth Support?*”の全訳である。原著者のジョエル・コーエンは応用数学、人口学、生態学等の広範な分野でいずれも最先端の優れた業績をあげていることで著名であり、我が国においては特に数理生態学者として名高い。本書のテーマはそのタイトルが示すように「果たしてどのくらいの人間が地球上に生存できるのか?」という古典的問いに答えることである。著者も指摘しているとおり、近年の人口学者は人口の構造、死亡、出生、移動等の個々の側面については精緻なミクロ理論を展開する一方で、過去300年にわたって問われてきたこの基本的問いには沈黙しがちである。無論これは解答の困難さをよく知っているからであろうが、しかしこれは「人口問題」の基本にある根源的問いでもあり、世界人口の急速な増大を「問題」として取り上げる際の「アルキメデスの支点」である。

本書の前半の第2部「過去の人口増加」と第3部「将来の人口増加」はこれまでの世界人口の動向を概観するとともに将来の人口推定の評価を行っている。人口学者にはお馴染みの主題であろうが、ここでコーエンが強調することは人口予測がもつ不確実性と、他方における長期的な持続的成長の不可能性である。従って現状の人口成長率が持続することはありえず、変化は起こらねばならない。だが「いつ?、どのようにして?」—これが結局人口の許容量の問題に我々を逢着せしめることになる。

コーエンは本書の後半においてこの問いに対する17世紀以来の数々の解答の試みを丹念に収集し、かつ現代的な人口学や生態学の該博な知識をもとにその分析・評価を行うという前代未聞の試みを行っている。驚くことに過去における地球の人口許容量の評価は、その概念、方法、仮定に応じて極めて多様であり、なんと10億以下から1兆以上にまでわたっているが、多くは40億から160億の間の範囲に落ちることが示されている。しかしながらコーエン自身の評価値はついに示されることはない。それは結局のところ社会システムをも含めた広義の技術的可能性への予見とともに「我々が如何なる生活を望むのか」という問いへの解を前提にしなければならないからである。コーエンが指摘するように受動的で静的な「人口許容量」という観念はダイナミックに変化し続ける人間・環境系においては適切ではないのである。

しかしコーエンの地球人口の現状へ評価は「出生率転換」をあえて「進化」と呼んで、人類史に新たな次元を画するものとして評価するスタンスからも明らかである。すなわちコーエンは人類の人口規模が地球環境の許容量を意識せざるを得ないサイズになりつつあること、従って21世紀中には地球の規模の人口転換が必要とされることを認めており、本書の分析もそうした転換を可能にするための以下のような提案を結論としている。すなわち、効率性と平等性を調和させる制度の発展、人類の経済的および非経済的活動の効果影響を適切に評価するアカウンティングシステムの開発、人口・文化・経済・環境の相互作用の研究促進、相互援助に関する定量的理解、定常的世界への価値転換。

もとよりこのような問題に確定的な解答があろうはずもなく、結果的に提起されるコーエン自身の展望と提案も人口学者にとって目新しいものではないかもしれない。しかしそこに至る議論がかくも精緻にして首尾一貫、論理的になされた例はないであろう。コーエンは伝統的な道德律を越えて相互理解と価値転換を進めるためにも科学的分析を活用すべきことを教えてくれる。彼が指摘するように遺伝学的にみればレトリックではなく「人類は家族」であるし、現在の同胞や将来の子孫のために行動することには生物学的合理性がある。ただ我々は過去において局所的に合理的であった行為への執着を諸々の感情や宗教信条として持ち続けており、これを払拭することは容易なことではないかもしれない。

(稲葉 寿/東京大学)